

王維の「桃源行」について

―六朝山水田園詩の継承と発展―

齋藤 聡

はじめに

王維の「桃源行」(『王右丞文集』^(二) 卷第一)は、陶淵明の「桃花源記並詩」に描かれる桃花源を仙郷として翻案している。

このことに対する後世への影響の大きさは、後世の人々が「桃花源記並詩」に触れる際や「桃源行」を制作する際に、多かれ少なかれ「仙」に言及していることから窺える。

例えば、韓愈は「桃源図」(『朱文公校昌黎先生集』卷之三、四部叢刊初編)において「神仙有無何眇茫、桃源之説誠荒唐(神仙の有無 何ぞ眇茫たる、桃源の説 誠に荒唐たり)」と言い、桃花源が仙郷であることを荒唐だとして退ける。

劉禹錫は「桃源行」(『劉夢得文集』卷第八、四部叢刊初編)で「仙家一出尋無蹤、至今水流山重重(仙家 一たび出れば 尋ぬるも蹤無く、今に至るまで水流れ山重重たり)」と言い、「桃花源記並詩」を踏襲しつつも、桃花源を仙郷と見なしている。

また宋の李綱は「桃源行並序」(『全宋詩』^(二)卷一五五〇)の序に「桃源之事、世伝以為神仙、非也。(桃源の事、世に伝えて以て神仙と為すは、非なり。)」と言ひ、詩の本文でも「何須更論神仙事(何ぞ須らく更に論ぜん 神仙の事)」と言ひ桃花源が神仙であるという説を否定する。

このように、桃花源を仙郷として描いたことは後の詩人に大きな影響を与えている。^(三)

本論文では、「桃源行」の特徴である仙郷描写を検討し、その特徴を明らかにする。また「桃源行」に王維の自然詩の萌芽が見えることを考察する。

「桃源行」は詩題に「行」と付くことから、樂府を意識して制作されたと考えられる。そこで、「桃源行」の樂府としての性格についても検討していきたい。

一 陶淵明「桃花源記並詩」

まず始めに、王維の「桃源行」のもと歌である陶淵明の「桃花源記並詩」(『箋註陶淵明集』卷之五、四部叢刊初編)を見ておく。なお以降「桃花源記」を「記」、「桃花源詩」を「詩」と省略する。

「桃花源記並詩」に関しては、すでに多くの論文がある。本節ではそれらをふまえつつ、「記」と「詩」の特徴を確認しておく。

まず「記」を挙げる。

晋太元中、武陵人捕魚為業。緣溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步、中無雜樹。芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異之。復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。便捨船從口入。初極狹、纔通人。復

行數十歩、豁然開朗。土地平曠、屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作。男女衣着、悉如外人。黃髮垂髻、並怡然自樂。見漁人、乃大驚、問所從來。具答之。便要還家、設酒、殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉。遂與外人間隔。問今是何世。乃不知有漢、無論魏晉。此人一一為具言所聞。皆歎惋。余人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辭去。此中人語云不足為外人道也。既出、得其船、便扶向路、処処誌之。及郡下、詣太守說如此。太守即遣人隨其往、尋向所誌、遂迷不復得路。南陽劉子驥、高尚士也。聞之、欣然規往。未果、尋病終。後遂無問津者。

（晋の太元中、武陵の人魚を捕うるを業と為す。溪に縁りて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢う。岸を夾むこと數百歩、中に雜樹無し。芳草鮮美、落英繽紛たり。漁人甚だ之を異とす。復た前み行きて、其の林を窮めんと欲す。林水源に尽き、便ち一山を得たり。山に小口有り、髣髴として光有るがごとし。便ち船を捨て口より入る。初め極めて狭く、纔かに人を通ずるのみ。復た行くこと數十歩、豁然として開朗す。土地平曠、屋舍儼然たり。良田美池桑竹の属有り。阡陌交ごも通じ、鶏犬相聞ゆ。其の中に往來して種作す。男女の衣着は、悉く外人のごとし。黄髮垂髻、並びに怡然として自ら楽しむ。漁人を見、乃ち大いに驚き、従りて來たる所を問う。具に之に答う。便ち要えて家に還り、酒を設け、鶏を殺して食を作る。村中此の人有るを聞き、咸來たりて問訊す。自ら云う「先世秦時の亂を避け、妻子邑人を率いて此の絶境に來たり、復た出でず。遂に外人と間隔す。」と。今是れ何れの世なるかを問う。乃ち漢有るを知らず、魏晉に論無し。此の人一一為に具に聞く所を言う。皆歎惋す。余人各おの復た延き其の家に至り、皆酒食を出だす。停まること數日にして、辞去す。此の中の人語げて云う「外人の為に道うに足らざるなり。」と。既に出で、其の船を得、便ち向の路に扶り、処処に之を誌す。郡下に及び、太守に詣りて説くこと此のごとし。太守即ち人をして其の往くに隨わしめ、向に誌す所を尋ぬるも、遂に迷いて復た路

を得ず。南陽の劉子驥は、高尚の士なり。之を聞き、欣然として往かんことを規る。未だ果たさざるに、尋いで病みて終わる。後遂に津を問う者無し。」

「記」が、他の六朝の「仙郷談」や「洞窟探訪説話」などと大枠では共通点を持ちつつも、細かい点で差違を持ち、全体的にやや異質であることはすでに多くの指摘がある。^(四)

その差違のうち大きなものは、異界とそこに存在する人物の性質であろう。「仙郷談」も「洞窟探訪説話」も、そこに描かれる異界は仙郷であり、異界にいるのは一般的には仙人、また仙女など仙界の人物である。一方、「記」では、異界は人間の世界の田園として描かれ、そこにいるのは農民である。

川合康三氏は、「異界物語においては異界の住人の何よりの特徴は、異人であることの自覚を彼らのアイデンティティとしてあることにある。ところが桃花源の住人にその意識は全くない」と、「記」の桃花源の住人が六朝の「仙郷談」や「洞窟探訪説話」と大きな差違を持つことを指摘する。

「記」は、陶淵明が思う理想の社会を記述するために、「仙郷談」や「洞窟探訪説話」の大枠を用いつつ、異界を人間的な田園空間^(六)として描いたところに特徴がある。^(七)

次に「詩」を見ていこう。

1 嬴氏乱天紀 嬴氏 天紀を乱し

賢者避其世 賢者 其の世を避く

黄綺之商山 黄綺 商山に之き

伊人亦云逝 伊人も亦た云に逝く

5 往迹浸復湮 往迹 浸ようやくく復た湮み

来径遂蕪廢 来たる径は遂に蕪廢す

相命肆農耕 相い命じ 農耕に肆つとめ

日入従所憇 日入りて憇う所に従う

桑竹垂余蔭 桑竹 余蔭を垂れ

10 菽稷隨時芸 菽稷 時に隨いて芸う

春蚕收長糸 春蚕 長糸を收め

秋熟靡王税 秋熟 王税靡し

荒路曖交通 荒路 曖として交わり通じ

鷄犬互鳴吠 鷄犬 互いに 鳴吠す

15 俎豆猶古法 俎豆 猶お古法

衣裳無新製 衣裳 新製無し

童孺縱行歌 童孺 縱ほしいまま に行歌し

斑白歛游詣 斑白 歛んで游詣す

草榮識節和 草榮えて 節の和するを識り

20 木衰知風厲 木衰えて 風の厲しきを知る

雖無紀曆誌 紀曆の誌無しと雖も

四時自成歲 四時 自ら歳を成す

怡然有余樂 怡然として余樂有り

于何勞智慧 何に于いて智慧を勞せん

25 奇蹤隱五百 奇蹤 隠ること五百

一朝敵神界 一朝 神界敵く

淳薄既異源 淳薄 既に源を異にし

旋復還幽蔽 旋たちまちにして復た還た幽蔽す

借問游方士 借問す 游方の士

30 焉測塵囂外 焉くんぞ塵囂じんこうの外を測らん

願言躡輕風 願こゝわくは言に輕風を躡みて

高舉尋吾契 高舉し吾が契を尋ねん

「詩」の冒頭四句で、桃花源の住人は秦亂を避けて隠れた四皓に擬せられる。「記」では「先世避秦時亂」と語られるのみだったが、「詩」では、秦の体制に反して隠れた人々として描かれる。

五、六句目で、俗世と桃花源を往来する道が断たれたことが述べられ、七句目から二十四句目まで、桃花源とその住人の様子が描かれる。

桃花源と住人の様子に関して、「詩」が「記」と大きく異なっているのは、桃花源の住人が自然の周期に従って生活していることを強調していることである。

桃花源の住人は、農業に励み（相命肆農耕、七句目）、作物は季節に適した物を植え（菽稷隨時芸、十句目）、日没とともに帰宅する（日入従所憩、八句目）。季節は周囲の草木などを見て知り（草榮識節和、木衰知風厲、十九、二十句目）、彼等の生活には曆が無くても自然と一年が巡る（雖無紀曆誌、四時自成歳、二十一、二十二句目）。しかも、そのような

生活をつらいと思うどころか、十分なほど楽しんでいる（怡然有余楽、二二三句目）。

「記」において、桃花源と住人の様子は「有良田美池桑竹之属。阡陌交通、鶏犬相聞。其中往来種作。男女衣著、悉如外人。黄髮垂髻、並怡然自樂」と、その説明が非常に簡素であるのに対し、「詩」では、自然に従って生きる桃花源の住人の描写に、全体の半分以上の句を費やしている。

そして、末二句で「願言躡輕風、高举尋吾契」と言い、自適の生活を送る桃花源の住人を羨ましく思い、訪れたいという願望を述べる。陶淵明にとって桃花源の世界は理想の世界なのである。

しかし、「詩」は、陶淵明の漠然とした桃花源へのあこがれを詠じたものではない。

十二句目に「王税」と言い、二十一句目に「紀曆」と言つて、桃花源の生活は外界のそれも国家の大事に関する事項と対比される。それにより、桃花源の生活がいかに拘束のない自由なものであるかを強調することで、外界の政治体制を批判する。

また、二十四句目に「于何勞智慧」と言い、智慧を労する必要のない桃花源の世界と違つて「王税」や「紀曆」に頭を悩ませられる俗世を皮肉る。

三十句目では「焉測塵囂外」と言つて、俗世の外に別な世界があるということを考えることすらもできない俗世の人（遊方士）を皮肉っている。

このように、「詩」は、単に理想世界や自適の生活へのあこがれだけを述べるのではなく、桃花源へのあこがれを述べることで政治への批判や諷諭をも意図して作られた作品なのである。

二 「桃源行」における仙郷表現の手法

前節では、「詩」は「記」の物語をただ焼き直しただけの作品ではなく、政治への批判・諷諭の意図を持って作られた作品であることを見た。

本節では、王維の「桃源行」は「記」「詩」と比較した場合、どのような特徴があるのかを見ていきたい。
次に王維の「桃源行」を挙げる。

1 漁舟逐水愛山春 漁舟 水を逐い 山春を愛す

兩岸桃花挾（八）去津 兩岸の桃花 去津を挾む

坐看紅樹不知遠 坐に看る 紅樹の遠きを知らずを

行尽青溪不見人 青溪を行き尽し 人を見ず

5 山口潛行始隈隩 山口 潛行し 始めて隈隩

山開曠望旋平陸 山開き曠望すれば平陸を旋る

遙看一処攢雲樹 遙かに看る 一処に 雲樹攢まるを

近入千家散花竹 近づきて入れば 千家 花竹を散ず

樵客初伝漢姓名 樵客 初めて伝う漢の姓名

10 居人未改秦衣服 居人 未だ改めず 秦の衣服

居人共住武陵源 居人 共に住む 武陵の源

還従物外起田園 還また 物外より田園を起こす

月明松下房櫺靜 月は松下に明るく 房櫺靜かに

日出雲中鷄犬喧 日は雲中に出で 鷄犬喧し

15 驚聞俗客争来集 驚きて俗客に聞かんとして争い来たりて集まり

競引還家問都邑 競いて引き家に還りて都邑を問う

平明閭巷掃花開 平明 閭巷 花を掃いて開け

薄暮漁樵乘水入 薄暮 漁樵 水に乗じて入る

初因避地去人間 初め地を避くるに因りて人間を去り

20 更問成仙遂不還 更に問う 仙と成りて遂に還らざるを

峽裏誰知有人事 峽裏 誰か知らん人事有るを

世中遙望空雲山 世中 遙かに望むも 雲山空し

不疑靈境難聞見 疑わず 靈境の聞見し難きを

塵心未尽思郷県 塵心 未だ尽きず 郷県を思うを

25 出洞無論隔山水 洞を出で論ずる無し山水を隔つるを

辞家終擬長游衍 家を辞し 終に長く游衍せんと擬すほつ

自謂經過旧不迷 自ら謂う 經過して旧は迷わず

安知峰壑今来変 安んぞ知らん 峰壑の 今来 変ずるを

当时只記入山深 当时 只記し 山の深きに入り

30 清溪幾度到雲林 清溪 幾度 雲林に到る

春来遍是桃花水 春来たり 遍く是れ 桃花の水

不弁仙源何处尋 弁せず 仙源の何处にか尋ぬるを

「桃源行」の一句目から二十二句目までは、「記」の桃花源訪問譚を大枠で踏襲している。例えば、漁師が桃花源に迷い込む場面で、「記」では「縁溪行、忘路之遠近」といい、「桃源行」では「坐看紅樹不知遠」という。

漁師が山に入って桃花源へ出る場面は、「記」では「初極狹、纔通人、復行数十步、豁然開朗、土地平曠」といい、「桃源行」では「山口潜行始隈隩、山開曠望旋平陸」という。

漁師を見た桃花源の住人の反応も「記」では「乃大驚、問所從來」といい「桃源行」では「驚聞俗客争来集、競引還家問都邑」という。

一方、二十三句目からは、漁師が桃花源を出てからの行動や考えるところが述べられている。

この部分のストーリーや表現は「記」や「詩」には無いものであるが、「安知峰壑今来变」や「春来遍是桃花水、不弁仙源何处寻」と桃花源に再訪できない理由を述べる点や、「出洞無論隔山水、辞家终擬長游衍」と桃花源へのあこがれを述べる点などは「詩」と共通しており、「詩」の二十五句以降の構成を用いたのだと考えられる。

内容の面では、桃花源を仙郷として描いたことが「記」「詩」と「桃源行」との差違である。

第一節で見たように、六朝の「仙郷談」や「洞窟探訪説話」における異界は一般的に仙郷として描かれており、異界である桃花源を仙郷と描かない「記」がむしろ特殊なのである。

唐代において、桃花源を仙郷に喩えることは希有なことではない^(九)。例えば初唐の王績^(十)の「遊仙四首」其三（『東臯子集』巻中、四部叢刊統編）の前半部分には次のように言う。

結衣尋野路 衣を結んで 野路を尋ね

負杖入山門 杖を負いて山門に入る

道士言無宅 道士 宅無しと言うも

仙人更有村 仙人 更に村有り

斜溪横桂渚 斜溪 桂渚を横ぎり

小径入桃源 小径 桃源に入る

四句目に「仙人更有村」と述べられており、この詩の「桃源」が仙郷の喩えとして用いられていることがわかる。

「桃源行」において、「仙」に関する描写は、二十句目の「更問成仙遂不還」と三十二句目の「不弁仙源何処尋」の二箇所である。

これらはいずれも訪問者である漁師の認識として描かれている。桃花源の住人自らが桃花源を仙郷であるとか自分たちは仙人になったとは述べられておらず、桃花源とその住人が仙郷・仙人であるとする具体的客観的な表現もない。^(十二)

「桃源行」において、桃花源は「田園」(十二句)であり、その住人は「居人」(十、十一句)あるいは「漁樵」(十八句)など人間として描かれており、「記」に描かれる桃花源と変わらない。

「桃源行」は、「記」の田園的桃花源を継承しつつも、桃花源を直接に「仙」と言わずに、仙郷を表現しているのである。

三 「桃源行」における謝靈運の影響

前節では、「桃源行」の特徴を見た。

では、桃花源を仙郷として詠じるという既出の手法を用いたのはいかなる影響からであろうか。

大局的に見れば当時の社会の影響があるであろう。程千帆氏は、玄宗期に道教が盛行したことが影響していると指摘している。^(十二)

局所的に見れば、王維の自然詩形成に大きな影響を与えた謝靈運の影響が大きいためであろう。

北島大悟氏が「謝靈運にとって、靈域の跋涉も、その中の神仙の探求や「理」の重視も、突き詰めれば昇仙への希求であり、それは超越的存在・根源的存在への憧憬であった」と指摘するように、^(十三)謝靈運の山水詩には山中で隠者や神仙と接しようとするものが多い。

例えば、「從斤竹澗越嶺溪行」(『文選』卷第二十二・遊覽)では、

15 想見山阿人 想い見る 山阿の人

16 薜蘿若在眼 薜蘿 眼に在るが若し

と、山中の自然に接し、まぶたに隠者を見るようだと述べる。

「入華子崗是麻源第三谷」(『文選』卷第二十六・行旅上)では、

9 遂登群峰首 遂に群峰の首に登れば

10 邈若升雲煙 邈^{はる}かなること雲煙に升るが若し

と、群れなす峰の頂きに登ればまさに昇仙したような気分だと述べる。

「登江中孤嶼」(『文選』卷第二十六・行旅上)では、

13 始信安期術 始めて信ず 安期の術

14 得尽養生年 養生の年を尽くすを得るを

と、神々しい風景を目にしてようやく安期生の長生術を信じたことができたと述べる。

このように、謝靈運の数々の山水詩には、山に入って神仙的な体験をする様子が述べられている。

「桃源行」の漁師が山に入っていくのは、一句目に「漁舟逐水愛山春」とあるように、山の風景を觀賞し美しさを樂しむためである。

精神的な充足のために山に入るといふ態度は謝靈運と共通しており、ここに謝靈運の影響が見られる。

四 「桃源行」における自然描写―象徴としての「白雲」―

第二節で「桃源行」は仙郷とは直接言わずに仙郷を表現していることを述べた。

そのため、「桃源行」では、桃花源を仙郷と意識させる雰囲気が重要な役割を果たしている。特に、「桃源行」に詠じられる雲は、桃花源を仙郷と意識させるのに重要な役割を担っている。

王維にはあこがれの象徴として用いられる「白雲」があり、このことに関してはすでに論文がある。^(十四)

「白雲」の語は謝靈運の詩に見える。例えば「過始寧墅」(『文選』卷第二十六・行旅上)に

15 白雲抱幽石 白雲 幽石を抱き

16 緑篠媚清漣 緑篠 清漣に媚ぶ

とあり、また、「入彭蠡湖口」(『文選』卷第二十六・行旅上)に、

7 春晚緑野秀 春 晩れて 緑野 秀で

8 巖高白雲屯 巖 高えて 白雲 屯る

とある。

謝靈運にとって山は宗教体験の場であり、昇仙の場所であるとするならば、その重要な場所に生じる白雲は、これら宗教や昇仙を象徴するものとして用いられていると言えるであろう。

このように見れば、「白雲」の用法は謝靈運と王維とで近似しており、王維の「白雲」の用法には謝靈運の影響がみられるのである。

そのあこがれの象徴としての「白雲」の用法の萌芽とも言うべき雲の用い方が「桃源行」に見られる。

六句目で「山開曠望旋平陸」とまず遠景として広々とした空間が広がることを言い、次いで七句目には「遙看一処攢雲樹」と広々とした「平陸」の中に雲の集まった不思議な場所つまり桃花源があることが述べられる。「雲樹」は「平陸」内にある桃花源を象徴的に示している。

十一句目では村の昼間の様子が「日出雲中鷄犬喧」と表現され、桃花源が雲の中にあることが述べられる。「雲中」は、『楚辞』に仙郷の比喩^(十五)として用いられるように、ここでは桃花源を仙郷に喩えている。

また、二十二句目「世中遙望空雲山」の「雲山」も桃花源を象徴するものとして用いられている。

これは「帰輞川作」(巻第四)の三、四句目に、

悠然遠山暮 悠然たり遠山の暮

独向白雲歸 独り白雲に向いて帰る

といい、輞川を白雲で象徴させるのと同じである。

このように、「桃源行」では、雲を象徴的に用いることによって、桃花源を仙郷に見立てるための雰囲気を演出しているのである。

五 樂府としての「桃源行」の性格

「桃源行」が「行」という樂府的な詩題であることの意味を考えてみたい。

「桃源行」の作詩の方法は樂府の作詩の方法に似ている。

樂府は、作詩の際に一定の樂府題とその樂府題に定められた内容を受けて制作される。詩人は、先人の作品を継承しつつも、独自の世界を樂府の中に詠じるのである。

王維の「桃源行」は、陶淵明の「記」「詩」という先行する詩題と内容を受けつつも、王維自身の新たななる桃花源を詠じており、その発想は樂府と同じである。

「桃源行」の獨創性は、樂府題ではない作品を題材として、樂府のような作詩方法で制作したというところにある。

「桃源行」は、伝統的な樂府とは異なった方法で作詩しているというだけでなく、拠るべき樂府題を持たない中唐以降の新樂府とも一線を画しているのである。

「桃源行」は王維の樂府に対する挑戦だったと言ってよいであろう。

おわりに

本論文では、王維の「桃源行」について考察してきた。

王維の「桃源行」は、「記」「詩」を踏襲しながら、桃花源を仙郷として詠じている。仙郷を表現する手法は、桃花源とその住人を直接に「仙」と言わずに仙郷を表現するという方法であった。また、その仙郷の描写には謝靈運の影響が

あることを本論文では指摘した。

「桃源行」では、仙郷を直接に「仙」と言わないため、読者に桃花源を仙郷と認識させるための雰囲気工夫が施されている。

その中でも雲の表現が特徴的であることを見た。

「桃源行」では、雲に象徴的な意味合いを込めることで、仙郷を演出していた。これは、王維の特徴的景物である「白雲」の萌芽とも言うべき用法であった。

入谷仙介氏は王維の自然詩の特徴を、謝靈運の山水詩と陶淵明の田園詩の統一・総合させた中国における自然文学の伝統の集大成者であると指摘する^(十六)。

「桃源行」は、まさに陶淵明の世界と謝靈運の世界を融合させた作品と言えるだろう。

「桃源行」は王維が十九歳の時の作品^(十七)であるが、入谷氏の指摘する王維の自然詩の特徴が、十九歳という青年期にみえることは、王維の詩風がかなり早い段階から確立していたことを示唆している^(十八)。

また、「桃源行」という詩題からは、楽府題ではない作品を題材として、楽府のような作詩方法で制作するという王維の楽府に対する挑戦が見える。青年期の王維が楽府に対して新しいアプローチを模索していたことが窺えるのである。

注

(一) 底本として静嘉堂文庫蔵宋版『王右丞文集』（古典研究会叢書 漢籍之部 第三十二卷 汲古書院、二〇〇五）を用いた。

(二) 第二十七冊 北京大学出版社、一九九六

(三) ただし、桃花源を仙郷と見なすのは王維が嚆矢ではない。このことは第二節で論じる。

(四) 例えば、「記」と「仙郷談」の関係については小川環樹「神話より小説へ—中国の楽園表象」(『小川環樹著作集』第四巻 筑摩書房、一九九七)等を参照。「記」と「洞窟探訪説話」の関係については門脇廣文「陶淵明〈桃花源記〉小考—「洞窟探訪説話」との比較において—」(六朝学術学会『六朝学術学会報』第三集、二〇〇二)等を参照。

(五) 「桃花源記」を読みなおす(説話と説話文学の会『説話論集』第十四集 清文堂出版社、二〇〇四)

(六) 門脇廣文氏は、「桃花源」の世界は、陶淵明が隠棲した「田園」をそのまま説話の形で表現したものではないかと述べ、田園も桃花源も世俗でも超俗でもない中間的な世界ととらえている(「陶淵明〈桃花源記〉小考—「世俗」と「超俗」のあいだに—」林田慎之助博士古稀記念論集委員会『中国読書人の政治と文学』創文社、二〇〇二)。確かに、「記」に描かれる桃花源は、「帰園田居五首」其一(卷之二)などに描かれる田園とさほど変わらない。

(七) 「記」の文学的価値について、小川環樹氏は「おそらく当時の民間伝説を充分利用しつつも、仙郷を人間世界に持ちこむことによって、作者のある想念、自己の求めえなかった理想を託したところにある」(「神話より小説へ—中国の楽園表象」と言い、川合康三氏は「possibleであってもprobableでない世界を表現することによって文学たりうる」(「桃花源記」を読みなおす)と言う。

(八) 底本は「俠」に作るが、中国国家図書館蔵宋版『王摩詰文集』(北京図書館、二〇〇二)によって改めた。

(九) 松本肇氏は「唐詩に見える桃花源—非充足の快樂」(『唐代文学の視点』第六編第二章 研文出版、二〇〇六)において、あこがれの場所として詠じられていた桃花源が、中唐期になると絶対に必要なものではなく、到達できなくてもよいという考えが生じたことを指摘する。そのような考え方の早い例として松本氏は裴迪の「春日与王右丞過新昌里訪呂逸人不遇」(『全唐詩』卷一二九)を挙げる。この詩には王維の「春日与裴迪過新昌里訪呂逸人不遇」(卷第四)という同詠作品が現存する。この王維の詩にも第一句目に「桃源一向絶風塵」と「桃源」の語が使われており、この詩で「桃源」は呂逸人の居所のたとえであり理想の世界を表している。これは裴迪とは対極的な用例である。王維と裴迪とで対極的な「桃源」の用例が存在することは、二人の詩風を考える上で興味深い。特に、「輞川集」(卷第四)における王維と裴迪の役割等を考える上で大きな手がかりにな

るかも知れない。

(十) 入谷仙介氏は、田園詩人としての発展はわずかであるとしつつも、王績を陶淵明の直接の継承者と言える人物と見ている(『王維研究』東洋学叢書 創文社、一九七六、五三九頁)。しかし、王績に桃花源を仙郷に喩える用例があるのは、王維における陶淵明の影響を考える上で王績が重要な役割を果たしている可能性を示唆する。

(十一) 例えば、劉禹錫「桃源行」(『劉夢得文集』卷第八)では「俗人毛骨驚仙子」(九句目)と桃花源の住人を仙人とする具体的な記述がある。

(十二) 「相同的題材与不相同的主题、形象、风格——四篇桃源詩的比較研究」(『古詩考索』上海古籍出版、一九八四)

(十三) 「謝靈運にみる道教的思惟の受容」(日本中国学会『日本中国学会報』第五十七集、二〇〇五)

(十四) 専論には都留春雄「王維詩に詠ぜられた「白雲」について」(滋賀大学国文会『滋賀大國文』第三号、一九七三)、齋藤聡「王維詩における「白雲」について」(国士館大学漢学会『国士館大学漢学紀要』第五号、二〇〇三)がある。また、王維の「白雲」に言及するものとして荒井健「李賀の詩」(京都大学文学部中国語学中国文学研究室『中国文学報』第三冊、一九五五)、鈴木修次「王維の詩風」(『唐代詩人論 上巻』鳳出版、一九七三)等がある。

(十五) 「九歌・雲中君」の「森遠舉兮雲中」の王逸注に「雲中、雲神所居也」とある。

(十六) 入谷仙介『王維研究』第十二章 自然

(十七) 底本の「桃源行」の題下注に「時年十九」とある。

(十八) 王維の青年時代の研究は、後の王維の詩風に関する研究のみならず初唐から中唐へかけての自然詩の流れを研究する上でも重要なテーマである。